「WHO安全な手術ガイドライン」に基づいた当院の課題と現状

正しい患者の正しい部位に手術をするための取り組み

富士宮市立病院中央手術室
○小林和恵・石川賢子・寺尾智恵子

ＷＨＯ手術安全チェックリストの実施マニュアルでは、手術チームは手術に関わっている術者、麻酔科医、看護師、臨床工学技術士および他の職員からなり、手術チームの全てのメンバーが手術の安全と成功を確実にするための役割を果たすと述べている。

ＷＨＯ2009 年版の手術安全チェックリストは、その手術チームに対するチェックリストであり、また麻酔導入前、皮膚切開前、患者の手術室退室前と時期を分け、チェックを行うよう構成されている。そこで手術安全チェックリストの項目に沿って、当院の現状との比較を行った。その結果それぞれのチェック項目について対策はとられているが、ＷＨＯが必要としているタイムアウトのそれぞれの場面では確認されていない現状であった。また、医師との共通認識の難しさを痛感した。

次に、ＷＨＯ安全な手術ガイドラインの１．正しい患者に正しい手術をするための当院の取り組みについて述べる。医療事故の中で言い逃れのできない事故の一つに、患者誤認、手術部位間違いがある。ひとたび事故が起きると、重大事故となり医療訴訟に発展する。決して起こさないための対策と認識が必要である。

当院では誤認防止の対策として、患者に名前を名乗ってもらうこと、用紙等との照合、システムでの認証、各場面でのダブルチェックを行っている。その確認場面は、患者が手術室に到着時、病棟看護師から外回り看護師への申し送り時、各部屋入室時の麻酔システム(ORSYS)での認証時、タイムアウト時である。また、当院では、入院・手術・検査等の患者呼び出し依頼を受けたとき、呼び出しメモに記載している。そして他者へ依頼する場合はメモを渡し、受取った者は呼び出しメモと患者の確認を行っている。しかし思い込みによる患者の家族の呼び出し間違い、思い込みによる入室患者間違い、手術申込の左右間違い等が起きている。いずれも、入室時の確認により手術室での誤認防止はできている。

もう一つの対策として、看護師が作成したマニュアルおよび行動確認表でのチェックにより、看護師として安全な手術が提供できるよう努めている。今回、ＷＨＯ手術安全チェックリストと、当院のチェックリストを比較した結果、ＷＨＯ手術安全チェックリストは対象が手術チームになっている。しかし、当院のチェックリストは看護師が作成し、看護師が対象になっており、チームとしてのマニュアル作成の必要性を感じた。

上田氏は「ブリーフィングは、執刀前に外科医が手術の工程表を説明して、出血量の予測を含め問題点を明らかにしておく、そして輸血や準備物品、手術器材を確認したうえで手術を開始するものである。従来のように執刀医の予測が頭の中に留まっているのではな

く、言葉にして手術チームのメンバー全員に伝えることで、その手術の具体的内容と問題点を共有できること、予測される問題にも対応できるように、執刀直前に手術チームの意識を高めることに意義がある」と述べている。

当院の手術室では今後、一つひとつの手術をより安全に行うために手術チームとしての意識を高め、コミュニケーションを大切にし、情報や問題を共有していきたいと思う。